青梅市文化財ニュース

第２５５号

平成２１年1月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

木食白道と地蔵菩薩像

木食について

　木食とは、修行の一つで、五穀、十穀、肉類を食べず、塩や火を使って調理をせず、草の根や木の実を主な食料とする修行（木食戒）である。この木食僧は、数が多く、高野山の僧の応其（おうご 1537～1608）や生涯に十二万体の造仏を祈願して廻国した円空（えんくう 1632～1695）などが有名である。この修行の目的は、生きたまま成仏することであり、「即身仏（ミイラ）」になった僧もいた。

　白道も廻国聖、作仏聖のひとりで、人々の要望で仏像を造ったり、加持祈祷、勧進を行ないながら、生涯廻国を続けた木食僧である。

白道の地蔵菩薩像

　白道は、仏像や版画、名号などを、北海道、多摩地方、伊那地方、そして特に甲州の塩山や大月に数多く残している。白道が制作した仏像は、地蔵菩薩、観音菩薩、恵比寿大黒天像、薬師如来、不動明王が主である。その仏の特徴は、頭が逆三角形で額が広く、「ナタ彫り」と呼ばれるノミによる仕上げの一木造りである。仏の背面には「南無阿弥陀佛」の六字名号を笹書きしている。また、それらの仏の顔は、「微笑」の表情である。

　現在、多摩地方で確認されている白道の作品並びに資料は２２点。そのうち、青梅市内には、住江町の延命寺に地蔵菩薩が伝わっている。仏像の大きさは、高さ５５ｃｍ。時代は天明から寛政のころの作仏と思われる。

白道の生涯

　白道は、宝暦５年（1755）に、現在の甲州市塩山に生まれたとされる。姓は小野氏という。７才の時、塩山・上萩原の法幢院にて剃髪・出家。父とともに廻国巡礼に出る。途中の四国で父を亡くすが、１０代後半になり再び廻国。新潟、信州、北関東、東北地方の名刹を巡る。そのころは「宗安」と名乗っていた。

　安永２年（1773）、伊豆にて真言宗の木食僧と出会い弟子となり、これより「白道」を名乗る。その木食僧は、同郷の行道（木喰五行、明満上人）と考えられている。翌年、師の行道とともに北海道に渡る。このころより白道は供養仏を作仏し始めたようである。一般に木喰上人といえば行道のことで、日本各地を廻国し、千体仏作仏の祈願を達成した人物である。その作品を「微笑仏」という。その行道も白道と出会ってから作仏を始めた様である。後に白道は信州で行道と別れ甲州に戻ることになるが、途中、二人は栃木県鹿沼市栃

窪の徳性院に共同制作の薬師三尊および十二神将を造立している。

寛政元年（1789）には、あきる野市引田の真照寺で薬師如来開帳行事に協力、翌年は梵鐘制作に協力した。

寛政６年（1794）に日暮里の青雲寺の弟子となり、聖観音菩薩本堂と鎮守金比羅本社拝殿建立のため、江戸市中や多摩地方を勧進する。そのころ青梅市内を材木寄進のため廻ったと思われる。

その後は、寛政９年（1797）に上野原において井戸加持祈祷、寛政１２年（1800）には信州伊那地方へも廻国する。

享和４年（1804）頃には、大月市鳥沢に草庵、上人屋敷に居を移す。上人屋敷は、大月市内の円福寺の末寺、光明院のことと考えられ、そこを拠点に２０年間、塩山や多摩地方に活動したものと推測される。師の行道も、鳥沢へ来て文化７年（1810）に亡くなるまで白道と同居した可能性が大きい（円福寺過去帳）。

文政８年（1825）１２月２４日、上人屋敷にて入定（即身仏）したとも伝えられるが、法幢院などの過去帳によると「病死」とされており、定かではない。７１才だった。白道の墓石は、円福寺に移され、生誕地の小野家屋敷墓地内にも伝えられる。

［参考文献］　木食白道　知られざるもう一人の木食（山梨ふるさと文庫）
多摩の微笑仏　　―木食白道―　　（福生市郷土資料室）

（文責　大久保　芳木）